

美禰子とよし子のヴァイオリン

Junko Higasa 2014.7.8

『吾輩は猫である』講座の寒月君のヴァイオリンのところで、一等国に相応しい子供の教育ができる母親になるための条件の一つが「ヴァイオリンが弾けること」で、それは『三四郎』にも出てくると習った。その観点から見ると、ヴァイオリンは美禰子とよし子の結婚問題の代弁者である。

まず二人の環境条件から見ると、よし子の兄は立派な研究者ながら薄給である。美禰子の兄は経済的に豊からしい。ここで結婚を決める家長が、形のない名誉と形のある経済の対極にいることがわかる。

そして本人の女の世間的価値という観点から見ると、よし子は画を描き、美禰子は語学を学ぶ。これも対極である。しかしよし子は、自分のヴァイオリンは和製で音が悪いので、せめて美禰子さんくらいのに買い替えてくれと兄に頼んでいる。ということは、西洋化していく社会で、女として同レベル以上の結婚をして母親になることを目指している。

そして何よりも重要な意味を含むのは、三四郎が美禰子の家を訪ねた時に聴いたヴァイオリンの高い音と低い音である。それは曲の一部を弾いたとは受け取れない。ただ鳴らただけである。すなわち、それは美禰子が三四郎に送った明らかなメッセージである。美禰子は家長の決定による結婚時期が迫っていることと、自分の結婚相手のレベルについてヴァイオリンの音の高低で表現したのである。